

印象 36 編 — 2021 年 1 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

・月間の投稿が 2000 編を超え、私の佳作推しも 200 編を超えた。総評に残した作品も 36 編と、今までで一番多い。それでも、佳作率は約 10%、総評率は 2% に満たない。月間 2000 編は、毎日一冊の詩集を読み続けることに相当し、読み流しができない一編一編に判断を求められる読書は想像以上に大変な作業である。佳い作品との出会いが作業の力になっている。

総評を纏めた「ことばの力詩集」が刊行されはじめた。紙面でも作品をシェアできるようになったことを喜びたい。

今月は、さいう、白野という新たな才能の登場に注目した。

● 燦 嗣 ひとり ● (愛知)

おにぎりにひっそり分ける閉塞感

* コロナ禍で、個食するコンビニのお握りだろうか。

● 合川 秋穂 ● (京都)

アレクサはいつも丁寧語で光消す

* 長く一緒に暮らしていても、アレクサ

は丁寧語が改まらない。よそよそしい。
アレクサにはため口バージョンの開発が
必要かもしれない。

● さいう ● (愛知)

ざうざうと犬が雷雨に吠えている

* パトカーにも救急車にも吠える犬。雷
鳴にも吠える。「ざうざう」が、犬の恐
怖を吐き出す声に聞こえる。

● さいう ● (愛知)

暗くした台所の隅で
母はふんふんと
いつまでも
蜂蜜の匂いを嗅いでいる

* 「くんくん」ではない。「ふんふん」。
何かを探り、納得しようとする様子だろ
う。名探偵の母は何をしている？

● さいう ● (愛知)

眠るきみからは
若葉の匂いがして
銀河は発火しているようだ

* 茨木のり子の詩の一節「今日もあまた
の小さな森で／水仙のような友情が生ま
れたり匂ったりしているだろう」を思い
出した。もうこんな香気に満ちた言葉で

書くことができなくなった私としては、
羨望に堪えない。

● さいう ● (愛知)

くらやみの自室に何もかも置いて
来たように立つくるぶしの白

* 「くるぶしの」「白」と、イメージの
焦点を絞ってゆく。すると、初句の「く
らやみの」が再び立ち現れる。

● さいう ● (愛知)

消したくて消せない
恋のように言う
きみがわたしの睡蓮だった

* 「睡蓮」の比喩の意味が俄には了解で
きない。かわりに「この三朝あさなあさ
なをよそほひし睡蓮の花今朝はひらか
ず」(土屋文明)が突然浮かぶ。この睡
蓮と通うような気がするのだが。

● 女々死寝太郎 ● (東京)

ウドンコ病で
死んだダリアの死骸を
ゴミ箱に捨てた彼と別れた

* ダリアを捨てたことが別れの直接の原
因ではないだろう。しかし、ダリアを「枯
れた」と言わないで「死んだ」「死骸」

という感性と、枯れた花としてゴミ処理した「彼」と、根本のところでは世界観が違っていることは確か。

● 風船 ● (東京)

私が前にあげた
祖父の帽子が出てきたらしい
やっとな実感がわいてきた
祖父の死

* 遺品の整理の中で、帽子が発掘されたのだらう。祖父は、大切にしまっていたのか、忘れていたのか。祖父との繋がり
の再発見である。

● 春町美月 ● (大阪)

母の入院中
父の会社について行ったら
えらい人が
ソファで足の爪を切っていた

* 校長が激怒していると言って、教務主任に女子生徒の作文を見せてもらったことがある。校長室の机の上の赤い梅干しが印象的だったというものである。ほぼ全入のような学校で、入試の成績のよくなかった生徒を入学前に呼んで校長から訓示した。その感想だった。何もしていないうちから、入学前に校長から叱られるのでは生徒が可哀想だと反対したが、

私は若造に過ぎなかった。視線を落と
して、赤い梅干しを見つめるのが心の支え
だった生徒の心細そうな小さな肩が浮か
んで、心痛かった。私にはよく出来た作
文としか思えたので、顧問をしていた文
芸部に誘った。「ソファで足の爪を切っ
ていた」で思い出した。言っただけな
い一言で、喝破する子どもの視線が蘇
ったのである。

● 春町美月 ● (大阪)

次の歯科検診は五月
新緑と燕と蝶々と
早めの夏日とそれから
たぶんまだマスク

* 明るい五月の日々の想像の中に、「た
ぶんまだマスク」を入れなければならない
い無念さ。

● 燦嗣いとり ● (愛知)

永遠を信じないために
窮屈でかわいい制服を着ている

* なんちゃ制服までであると聞いて、なん
でそこまで制服を着たいのかわらな
かったが、「永遠を信じないために」と言
われると、深い真意を見せられた思
いになる。

● 鈴木雀 ● (東京)

蜘蛛は死んだら花になる

* 「ハナグモ」か。でなくとも、蜘蛛と花を結ぶイメージの飛躍と簡潔な表現に魅了される。

● 細村星一郎 ● (東京)

ランドセルびしょびしょ
氷柱だった水

* 氷柱を友達に見せるために、ランドセルに入れて登校したのだろう。

● 湯たんぼ ● (宮崎)

にんじんもちにんじん餅
人参餅を作ったの
とかけよる母の無邪気さよ

* 母にとって、人参餅を作ることは、小さな非日常的な営為だったのだろう。

● さいう ● (愛知)

保育士の赤鬼二匹しゃぼん玉

* 豆撒きで鬼役をしたのだろう二人の保育士は、鬼のお面を頭にして、いましゃぼん玉を吹いて園児の中心にいる。

● 藤色 ● (京都)

搔いてくれと
服を脱いで丸まる父の背中

* 「脱いで丸まる父の背中」の切なさ。
老いて丸まっていたというのではない。
いまは丸まる姿勢を作っているのである。
しかし、作者は、そこに予兆を見つけている。

● 春町美月 ● (大阪)

朝から
同じ場所にいる蜘蛛を
しばらく眺め
治療中の歯をまた
舌先でつつく

* 朝から小さな二つの違和感の中で佇む。

● さいう ● (愛知)

揚げたてのコロッケっぽい犬拾う

* 「揚げたてのコロッケっぽい」に感服。
日本犬の雑種だろう。思えば、日本犬は
大体コロッケ色だ。「揚げたて」に既に
情が移っている作者の姿が見える。

● さいう ● (愛知)

とん、とんと叩けば
きのこスープとか

作ってくれそうな家ふたつ

* 童話の中のような家。とん、とんとドアをノックして尋ねれば、暖かく迎えてくれそうなのだ。でも「そうな」。ドアをノックすることはない。

● 加藤美紀 ● (愛知)

うるかすも
したらもだっけも
通じない
そんな街にて
おはよう靴下

* 故郷の方言が通じない、違った文化の街で暮らす心細い日々。「おはよう靴下」は切ない。一日の仕事が始めるためにはく朝の靴下だ。

● さいう ● (愛知)

上下関係なんて
気にせず後輩は
宇宙と交信しながら帰る

* 「新人類」とか「超人類」とか「宇宙人」とか、オジサンたちは感性の違う若い世代を呼んだりするが、彼らはケセラセラ。会社が終われば、その宇宙に帰るのである。作者を確認したら、15歳。これは学年ギャップのこのようだった。

● 長谷川 柊香 ● (宮城)

曼珠沙華 同じ背丈で眠くなる

* 「同じ背丈」に、曼珠沙華の咲き方が写しとられている。木は立ったまま眠り、曼珠沙華の花は同じ高さで眠る。

● 加藤 美紀 ● (愛知)

家屋の点検と修理に
一ヶ月行った父が
明石焼きを
買って帰った記憶

* 父は震災復興の仕事をしたのであろう。明石焼きから推測して、阪神淡路大震災か。明石焼きのお土産は、父の一ヶ月の単身生活をも反映しているだろう。

● 真島 ● (京都)

アルバイト急募の張り紙
四つ角のセロテープに
挟まる犬の毛

* 犬の散歩をしながら張ったと思しき急募のビラ。セロテープに犬の毛を発見するくらいに、作者は近づいてみたのである。隠されたドラマを見つけようとする観察力だ。

● さいう ● (愛知)

金魚鉢からててぽぽと泡の匂い

* 「ててぽぽ」がいい。「泡」から「匂い」に焦点を移したところもいい。

● 儀間ゆみ ● (沖縄)

週末は親戚が来てた
ご馳走を並べる母が
泣いてたなんて

* 本家筋に、親戚が集まって飲み食いする風習があるのだろう。本家の嫁は、その席にもつげず、ご馳走を並べなければならぬ。怠れば何を言われるかしのれない。もちろん、持ち出しのご馳走だから、経済的にも大変だ。ご馳走の席について育った子どもには、その裏側の母が見えない。この宴が失われ、母が老いて愚痴を言えるような環境になって、子どもは初めて知るのである。

● 内田拓海 ● (神奈川)

むかし、小径で
ツツジの蜜を
吸ったりした日が
あったね、
なんて。

* 四キロ近い山道を通学した私は、出が

けに母から道草を食わずに帰れとよく言われた。ツツジの蜜は勿論、草の芽や穂など、本当に道草を食べながら帰っていたのだ。もう失われた「あった」日々だ。作者を見ると、なんと23歳と若い。まだ道草は残っている？

● 暮田真名 ● (東京)

パンチドラッカー
だけが笑ってる

* なぜかタコ八郎を思い出した。パンチドラッカーでなくても、ときに周りの文脈と違う反応をする人がいる。「だけが」が気にならない人だ。

● 岡田佳奈 ● (三重)

どこの誰とみた桜だろう。
花曇りの空に
記憶の断片がヒラヒラしている。

* 花見を毎年行事としていれは、その時々グループメンバーは忘れてしまうだろう。花の記憶のみが残り続ける。

● 白野 ● (新潟)

きみたちがさみしいことの
比喻として
ドブをながされていく桜

* 「さみしい」の比喩が「ドブをながされていく桜」では、ストレート過ぎる気もするが、自分のことならぬ「きみたち」のことである。

● さいう ● (愛知)
ただ暗いだけの空にも
太陽はあって
階段二段飛ばしで

* 「ただ暗いだけの空」は宇宙だろう。太陽も暗い宇宙に浮かぶ天体だ。「階段二段飛ばしで」の若い身体との照合が不思議な屈折を持っている。

● 燦嗣いとり ● (愛知)
楯円をたくさん書いていると
たまに卵の幽霊が紛れ込む

* フリーハンドで楯円を描き続ける中で、卵形の楯円が時々現るのを、「たまに卵の幽霊が紛れ込む」とよんだのだろうか。もちろん、その出現に偶然以上のものを感じているからの表現でもあろう。

● 西緑花 ● (京都)
私は山の上のほうにいましたが
大水以来
この河原の

ネムの下に居ます

* 「私」とは、誰（何）だろうか。誰かが探してはいないか。

● 白野 ● （新潟）

中庭のひかりの中で話したね
春の雨には匂いがないこと

* 「春の雨には匂いがない」は、夏目漱石訳の「月が綺麗ですね」に相当する言葉だろう。こちらは夜ではなくて、光眩しい白昼の世界での会話。